

文化の交差点

bunka to bunka no kousaten

2022年新樹号



contents

サークル見聞録

- 早大劇研'22新歓公演『センデンカイギ』 p 1
マンドリン楽部「第207回定期演奏会」 p 2

文化の案内板

- 劇団木霊2022年本公演
『職業的天使の祈り』 p 3

エッセイ

- ロシア文化を忌避する傾向に警鐘を鳴らす p 4

文化の散歩道

p 5

「文化の交差点」2022年新樹号

発行日:5月20日

発行者:「文化の交差点」編集委員会

代表・神原(教育4年)

連絡先:090-2331-4456

waseda-bunren@hotmail.co.jp



サークル見聞録

劇評
早大劇研'22新歓公演

『センデンカイギ』

(5月13日～15日 大隈講堂裏劇研アトリエ)



文句なしに面白い！ 久々にフィクションの力を実感した芝居でした。

舞台は、とある劇団の宣伝会議。次回公演の広報戦略をめぐり、劇団側と広告代理店側が激論。会議の行方は二転三転。小ネタ満載のコメディタッチのストーリーは、次第にシリアスな展開に。

「面白いとはどういうことか？」「口で説明したらその時点で面白くなくなる」。交わされる激論。その熱量は、これは本当に芝居なのか？本気で怒鳴りあっているのではないか？と思わせるほど。

たどり着いた答えは…それでも面白さは言葉で説明するしかない。確かに芝居の面白さを広報するという事は、どうしても矛盾に突き当たらざるを得ない。それでも奇をてらったり、曖昧にごまかしたりするのではなく、愚直にその矛盾に向き合おうとしているところに好感が持てる。

ひょっとしたら劇研さんの中では、リアルにこんな話になっているのかなと想像しつつも、劇研のみなさんはそんな観客の下世話な勘ぐりを裏切って、舌を出して笑っていたりして。フィクションをリアルに感じさせる脚本と役者の力量には脱帽。

それにしてもやっぱり芝居は生で観るのが一番とあらためて実感。生身の人間の感情がぶつかり合うカタルシスは、やっぱりマスク越しや画面越しでは味わえない。

いまの劇研には面白い顔をした役者がそろっている。個性あふれる面々がぶつかりあって、次にどんな新しいものを見せてくれるのか。いまから楽しみだ。(初鯉)

次回公演は→

早大劇研22'新歓公演『Re:ビドー』

作・演出:佐織祥伍

日時:6/10(金)～12(日) 場所:大隈講堂裏劇研アトリエ

ご予約は<http://ticket.corich.jp/apply/141896/>まで

マンドリン楽部 「第207回定期演奏会」を聴いて

(5月15日 川口総合文化センター リリア メインホール)



初夏の日曜日の昼下がり、マンドリン楽部さんの「第207回定期演奏会」を聴きにきました。最初は、聞き分けることができなかったマンドリンやマンドラ、ギターなどの音色の違いがだんだん分かってきて、音の重なりが感じられるようになってきたところが楽しかったです。

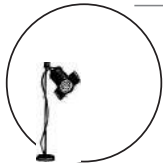
どこか懐かしい感じがする、前半のドヴォルザークも良かったです。一番印象に残ったのは、最後のサン＝サーンスの交響詩《死の舞踏》です。それまで可憐な音色を鳴らしていたマンドリンが、一転して奏でる不気味なメロディ。骨がカタカタ鳴る音、断末魔の叫び、死神の哄笑…。死の旋律

にのって骸骨たちがワルツを踊る姿が目には浮かびます。

これまでマンドリンというと陽気で軽妙なイメージがありましたが、こんな曲も演奏できるんだと、マンドリンの新たな魅力に気づかせてもらいました。

新型コロナウイルス感染がまだまだ収まらず、練習時間や場所に大きな制約を受けるなかで、2度目の対面とオンラインの「ハイブリット開催」での定期演奏会を成功させ、演奏会の新たなスタイルを築きつつあるマンドリン楽部さんの今後の活躍に期待です。

(河鹿)



劇団木霊2022年本公演

『職業的天使の祈り』

【日時】

5月26日(木) 17:00
5月27日(金) 17:00
5月28日(土) 12:00/17:00
5月29日(日) 12:00/17:00

【場所】 大隈講堂裏
劇団木霊アトリエ

【料金】 フリーカンパ制

【公演形態】 有観客
記録映像公開(5/30~6/30)
※映像記録の視聴へのご予約は不要です

【ご予約】 右のQRコードから
お願いします。



【作・演出】
峯川遼子

【出演】
大石水月、きよすけ、橘美海、
富樫萌々香、春名高歩、幸

ロシア文化を忌避する傾向に 警鐘を鳴らす

プーチン政権がウクライナに軍事侵攻したことを機に、いま欧米諸国や日本でロシアの文化・芸術を忌避したり排除する傾向が強まっている。例えば欧米ではロシアのオーケストラの演奏会ツアーが次々と中止になった。ここ日本でもある都市で開催予定だったロシア文学展が延期になり、さらにはネット上でロシア料理店に対する中傷や嫌がらせが書き込まれる事態もが起きた。「ロシア」という名がつくだけでその国の文化を避ける傾向に、私は危機感を覚える。

もちろん、プーチン大統領がウクライナの人々を殺戮し、ウクライナの国も民族も文化も消し去ろうとすることは絶対におかしい。しかしだからといって、この戦争を理由にロシアの文化・芸術が否定されていくことは到底認められない。むしろ他の文化・芸術とともに、ロシアで生み出されてきた文学作品や音楽などは、戦争が続く世の中で人間の心を豊かにする可能性を持つものとして、いま存在感を増しているのではないかと私は思う。

日本でソ連時代の作曲家・ショスタコービッチの曲に精通する指揮者の井上道義氏は次のように発言されている。「もし、(ショスタコービッチの曲を)ロシアの作曲家の作品という理由で演奏会から排除するとしたら、それはあまりに一面的な考えだ」「単純な敵・味方ではなく、距離を置いて対象を眺め、体験していないことを知り、複雑な背景に思いをめぐらす」ことにクラシックの本当の価値がある、と(読売新聞 4/15 夕刊より)。文化・芸術の価値や、私たち人間がそれを享受することの意義は、たとえ戦争を進めている国の文化・芸術なのだとしても、決して揺らぐことはない。

(蝸牛)



文化の 散歩道



雨続きの戸山の丘に、
今年も蛇莓が大豊作。
学館に向かう道の途中で、
早大生の目を楽しませ
てくれています。食べ
ても毒はないけど、お
いしくはありません(経
験者は語る)。

サークルの活動や企画紹介など、
投稿募集中です！
お気軽にご連絡を！
(連絡は表紙に掲載の「連絡先」
まで。)